

日本科学者会議
京都支部ニュース

3月号 No. 397

2017年3月13日発行

〒604-0931 京都市中京区二条通寺町東入榎木町95-3 南館3階

Tel/Fax : 075-256-3132

E-mail : jsa-kbranch3132@mbox.kyoto-inet.or.jp

URL : <http://web.kyoto-inet.or.jp/people/jsa-k/>

ゆうちょ銀行振替口座 加入者名：日本科学者会議京都支部 口座番号：01050-6-18166

ゆうちょ銀行総合口座 加入者名：日本科学者会議京都支部 口座番号：14480-2800181

上記総合口座を他金融機関からの会費振り込みの受取口座として利用される場合は以下の内容を指定して下さい。

店名：四四八（読み ヨンヨンハチ）、店番：448、預金種目：普通預金、口座番号：0280018

目次

- ◆ 軍事研究に関する学術会議声明（案）について……………2
- ◆ 京都支部学術集会(5/21)演題募集 2nd circular ……………3
- ◆ 第51回京都支部定期大会(5/21)の開催について……………3
- 第14回大学評価学会公開講演会(3/5)「大学はこのままでいいのか」……………4
- 関西技術者研究者懇談会2月例会(2/12)「異形花について」……………4
- 『日本の科学者』読書会2月例会(2/16)「熊本地震災害」……………5
- ★ 支部関連行事の案内……………7
- 寄稿：憲法を暮らしに生かす科学の目（富田道男）……………8
- ◆ 幹事会・ワーキング会議だより……………8
- ◆ 近畿の催し物案内：「JSA 近畿 No. 94.30」……………10

今年度会費の納入をお願いします！

会計年度末の4月末が近づきましたが、2月末の段階で40余名が今年度会費未納となっています。これらの今年度会費が完納されないと、今年度会計は赤字に転落してしまいそうです。未納会員には今回は別便で請求書と振り込み用紙を郵送いたしますので、早急に納入していただくようお願い申し上げます。
(財政担当幹事)

来年度所属が変更になる会員の皆様、アドレス、電話番号、住所を変更される会員の皆様へ

年度末が近づいてまいりました。次年度4月からの異動等がございましたら以下の二点につきまして何卒早めにご連絡ください。①新しい連絡先（住所、電話番号、メールアドレス）。②会誌送り先を何月号から変更するか。連絡先：京都支部メールアドレス（本ページ上部参照）

軍事研究に関する学術会議声明（案）について

学術会議の「安全保障と学術の関係についての検討委員会（第11回）」が、3月7日に開催され、下記の「声明（案）」が出されました。

1950年と1967年の「声明を継承する」とし、「政府による研究者の活動への介入が強まる懸念がある」「むしろ必要なのは、科学者の自主性・自律性が尊重される民生分野の研究資金の一層の充実」など評価しうる内容となっています。

しかし、「声明（案）」は、憲法9条との関連について全く触れていません。軍事研究は憲法違反であることを明確に述べて欲しいと思いました。そうでないと、軍事研究は「大学等の研究機関」以外でやってくれ、自分たちは手を汚したくない、と受け取られかねません。

そうはいつでも、今日の学術会議の実力からして、この内容は上出来です。これ以上後退しないよう、積極的に支持せざるを得ない、と思っています。

学術会議では、3月24日の幹事会を経て、4月総会（13日～15日）で決議されることになる、ということです。
(宗川吉汪)

軍事的安全保障研究に関する声明（案）

日本学術会議が1949年に創設され、1950年に「戦争を目的とする科学の研究は絶対にこれを行わない」旨の声明を、1967年には同じ文言を含む「軍事目的のための科学研究を行わない声明」を発した背景には、科学者コミュニティの戦争協力への反省と、再び同様の事態が生じることへの懸念があった。われわれは、大学等の研究機関における軍事的安全保障研究が学術の健全な発展と緊張関係にあることをここに確認し、上記2つの声明を継承する。

科学者コミュニティが追求すべきは、何よりも学術の健全な発展であり、それを通じて社会からの負託に応えることである。学術研究がとりわけ政府によって制約されたり動員されたりしがちであるという歴史的な経験をふまえて、研究の自主性・自律性が担保されなければならない。軍事的安全保障研究では、研究の期間内および期間後に、研究の方向性や秘密性の保持をめぐって、政府による研究者の活動への介入が強まる懸念がある。

防衛装備庁の「安全保障技術研究推進制度」（2015年度発足）では、将来の装備開発につなげるという明確な目的に沿って公募・審査が行われ、外部の専門家でなく職員が研究中の進捗管理を行うなど、政府による研究への介入が著しく、学術の健全な発展という見地から問題が多い。むしろ必要なのは、科学者の自主性・自律性が尊重される民生分野の研究資金の一層の充実である。

研究成果は、時に科学者の意図を離れて軍事目的に転用され、攻撃的な目的のためにも使用されうるため、研究の入り口で研究資金の出所等に関する慎重な判断が求められる。大学等の各

研究機関は、施設・情報・知的財産等の管理責任を有し、自由な研究・教育環境を維持する責任を負うことから、軍事的安全保障研究と見なされる可能性のある研究について、その適切性を技術的・倫理的に審査する制度を設けるべきである。学協会等において、それぞれの学術分野の性格に応じて、ガイドライン等を設定することも求められる。

研究の適切性をめぐっては、学術的な蓄積にもとづいて、科学者コミュニティにおいて一定の共通認識が形成される必要があり、個々の科学者はもとより、各研究機関、各分野の学協会、そして科学者コミュニティ全体が考え続けて行かなければならない。科学者を代表する機関としての日本学術会議は、そうした議論に資する知見を提供すべく、今後も率先して検討を進めて行く。

京都支部学術集会演題募集 2nd circular

21 総学の経験を踏まえて会員の日頃の研究成果を発表する場として、表記学術集会を支部大会にあわせて開催します。

日時：2017年5月21日（日）10：00～13：00

場所：同志社大学今出川キャンパス

内容：個人（共同）研究発表（6～9演題を予定）

以下の内容で演題を募集します。奮ってご応募ください。

原発、核兵器、軍学共同、大学運営、憲法、地球環境、災害、社会主義論などなど、科学の社会的機能に関する研究

応募期限：2017年4月6日（木）（4月7日（金）のワーキング会議でプログラムを作成します）

演題、氏名、要旨（1,200字程度）をメール添付にて下記宛お送り下さい。

E-mail：jsa-kbranch3132@mbox.kyoto-inet.or.jp

第51回京都支部定期大会の開催について

日時：2017年5月21日（日）14：00～16：00

場所：同志社大学今出川キャンパス

大会の議案書は京都支部ニュース2017年4月号でお送りします。

会場は京都支部学術集会と同じキャンパスです。

終了後に、懇親会（17:00～19:00）を予定しています。

第14回大学評価学会公開講演会報告 大学はこのままでいいのか

永田和宏氏（京都産業大学）

3月5日の午後、永田和宏氏（京都産業大学教授）が「大学はこのままでいいのか」をテーマに講演された。龍谷大学で開催された大学評価学会第14回全国大会の記念講演（公開）として企画されたもので、JSA京都支部が共催し、高等教育研究会が後援して開催された。

永田氏は、大学における教育が高校までの教育と異なる点について述べられた後に、大学における教育では「答が1つである問題は社会には存在しないことを教える」ことが必要であると強調された。また、大学の講義では、「何がまだわかっていないか」を教えなければならぬとされた。

なぜ学問をするのか、なぜ本を読むのか、と問いかけ、自分を知る、自己を相対化する、自己の可能性への信頼と確信を育む、という3点を述べ、教師は教えるのではなく、自ら

の喜びとして語る必要があることを強調された。

大学で行われているFD活動についても検討を加えられた。みんな同じ教師になって、これは大学でいいことなのかと述べて、FDに対する疑問を呈された。また、「教育の質保証」については、誰のための質保証かと述べられた。

永田氏の講演は、自らの実践を踏まえた大変魅力的な内容のものであった。京都産業大学における「マイ・チャレンジ」の様子は、文春新書『僕たちが何者でもなかった頃の話をしよう』にまとめられている。また、この記念講演の内容は、大学評価学会の年報『現代社会と大学評価』第13号（2017年6月刊行予定）に収録予定である。

（文責：龍谷大学分会・細川孝）

関西技術者研究者懇談会2月例会 異形花について－桔梗を中心にして－

日時：2017年2月12日（日）14時～17時
場所：JSAO 事務所
参加者：9名

「異形花について」桔梗を中心にして 報告・国村 勝氏

自宅の庭に咲く桔梗、サツキ、百日草、サルスベリ、ねじ花の観察を行い、植物の変形とその意味するところを考察した。

菊目・桔梗科の桔梗は雌雄同形花型で、自家不和合性の性質をもち、花はつぼみが徐々に緑から青紫に変わり、裂けて星形の花を咲かせる。

正常花は花びらが5枚、雌シベが5本である。

2014年8月15日から桔梗の観察を開始した。平均的に雄花は2日間咲き3日目に雌花に変わった。そして雌花は1日で枯れてしま

った。個体花としての寿命は約5日で、1株又は群落での花の寿命は約3ヶ月であった。

異形花の発生は6月末～7月半ばの盛りを過ぎた後、8月以降に咲きだす花に多い。そして異形花は種子ができないものや、種子ができて個数の少ないものが多い。子孫維持が難しいと考えられる。

異形花の形状は①花が2つ合体したようなもの、②内側花弁が渦巻き状のもの、③萼が花弁状に大きく発達し八重状になったもの、④花弁がなく萼が花弁状になったもの等、通常花とは大きく異なる各種の異形花を生じた。

袋掛けをした実験では、雌花の寿命が3日間と長いことが分かった。これは受粉すれば直ちに枯れて、種子の生育の為にエネルギーを使用する方が、種の保存には重要と考えられる。

また花びらを切除した場合でも、予想に反して十分種子をつけることができた。し

かし、これは花の群落に存在していたからであり、単独で存在している時には、吸蜜に集まる昆虫などの目印がなくなり、花びらのない方が不利になると考えられる。

討論

★雄蕊は、花が散ると同時、またはその前に散ってしまう。

★雄蕊は、容易に花弁に変形できるのではないか。

★自家受粉しても花粉管が伸びない。

★夏の花は、個体の寿命は短い、株単位では長い。冬の花は、個体の寿命が長い。

★ねじ花の巻方向に統一性はなかった。

これからの日程

3月12日(日)

後藤安子氏

瀬戸内の環境問題(エメックス会議をめぐって)

(文責・山口進次)

『日本の科学者』読書会2月例会報告 2月号特集：熊本地震災害から学ぶものはなにか 一災害研究・防災対策の現状と到達点一

標記例会が2月16日午後3時より支部事務所で開かれた。参加者6名。2月号特集より以下の3篇の論文が取り上げられた。

飯尾能久「熊本地震はなぜ起こったのか？」
(報告：鈴木博之)

熊本地震は、4月14日にM6.5、15日にM6.4の地震が発生した後、通常地震のように収束に向かうものとの予想に反して、16日にM7.3の最大地震が発生したために、大きな被害を出した「想定外」の地震であった。

この論文で著者はこの地震の地学的背景、特にM6に続くより大きな地震の発生原因を論じている。しかしながら、多数の分解能の悪い図を使い、説明も不十分で独断的であり、地質学を専門とする紹介者でさえ、理解が困難な論文である。専門外の読者にわかりやすく説明しようとする姿勢が見えない典型的な論文であると感じた。

まず、今回の断層モデルで検討すると、2つの前震は日奈久断層帯に沿った活動であっ

たが、本震は日奈久断層帯と布田川断層帯の両方ににまたがる活動であったとしているが、後の結論は説明不足で理解できなかった。また、M6 以上の前震の後により大きな本震が発生した例は、明治以後5例しかなく、そのうち本震がM7 以上は2例のみで、しかもこの2例は地震の時系列が異なるので、前震の30 日以内にM7 以上の地震が発生した例はないと断言している。しかし時系列がどのように異なるのかの説明は一切ないので紹介者にはこれも理解ができなかった。また、この結論は大地震の連動を軽視し今後の地震対策を油断させるものであると思う。

そして主題である大きな本震が発生した原因に関しては、著者独自の内陸地震の発生モデル「断層の下部延長の“ゆっくりすべり”による断層への応力集中が大地震を引き起こす」ことを主張している。本震の震源付近における地震の分布を詳細に解析すると、本震時に日奈久断層の深部では、前震の断層とは別のほぼ平行する断層が活動しており、これらが直上の2列の断層に応力集中を引き起こして大地震が発生すると説明している。分布図からこの解釈は不可能とは言えないが、かなりユニークな我田引水的解釈と感じる。もっと丁寧な説明がほしい。また、この説明ではなぜ九州中部地域で大地震が発生したかの説明にはなっていないと思う。

多賀直恒「市民と行政は、緊急事態に何を備えておくべきか—国家の総合リスク対策の提案」(報告：宗川吉注)

熊本地震の災害対応は、住民および行政の対策と避難行動が個別のかつ多様で、即時的な対策が困難を極めた。著者は、災害に当たっては、自治体施設ならびに住居の耐震化、

市民の自助・共助、行政の公助が必要と強調し、国の防災機関の創設を訴えた。

本論文を読んで、これがJJS の論文かと、目を疑った。

まず、「(3) 行政首長の直後の対応 熊本県と熊本市」における「浦島郁夫知事の言」の文章について。これは、朝日新聞2016年4月30日の引用であるが、内容全てが知事の言葉とは思えない。明らかに、記者？との対話になっているが、記者？の質問と知事の回答の区別がサッパリ分らない。このような文章を、しかも1ページも費やして、どうして掲載するのか。著者ならびに編集委員の見識が問われる。

次に、「大西一史市長の言」の文章も朝日新聞5月1日の引用である。1/2ページも使って新聞記事をそのまま載せている。しかも内容がそれまでの記述とすっかりダブっている。

論文に編集委員が目を通していないことがバレバレである。杜撰な編集はヤメてほしい。こんな論文？を読ませられる読者の身にもなってほしい。

千代崎一夫・山下千佳「熊本地震に学んで—全国の運動と具体的な活動」(報告：菅原建二)

本論文は、前半で、日本建築学会、国土交通省国土技術総合研究所、株式会社建研の熊本地震による益城町などの木造住宅の被害調査の結果を記述している。それによれば、①旧耐震基準(1980年以前)の住宅の被害率は、新耐震基準(1981年以降)に比較し顕著に高い。②全壊した新基準の住宅は全て2000年基準の接合部仕様を満たしていない。③2000年基準以降の木造住宅の被害率はそれ以前に比較して小さい。④西原村では、旧耐震基準と推測される木造住宅の倒壊・崩壊と傾斜地

における敷地被害や擁壁崩壊が多数確認された。⑤熊本市の850棟のマンションの80%が敷地・内外壁・エキスパンション・水槽・エレベーターなどで、なんらかの被害を受けた。倒壊や崩落に至ったのは旧基準のマンションだけである。上記記述だけでは分かりにくいので、本論文後半で記述されている東大地震研の平田直氏の講演内容を挙げておく。すなわち、益城町の木造家屋では、旧耐性基準の約45%、新耐性基準の16%、2000年基準の6%が大破・倒壊した。被害を大きくした要因として、平田氏は、震度7の地震が2回起きたこと、地盤が弱かったことを挙げている。これに対して、著者らは、熊本県は県の地域係数（地震発生頻度の地域差の指数、高い地域は高い、東京は1.0）を0.8と0.9に設定したことと耐震性向上対策への取り組み

の低さを挙げており、これらは人為的な要因である。

本論文の後半では、全国の運動と具体的な活動ということで、著者らの熊本での活動、大地震に関する著者らのパンフレットや書籍の出版などに触れられている。しかし、他には、2, 3の項目を除き、タイトルの「熊本地震に学んで」にはあまり関係が無く、また、全体的な脈絡や焦点が明確でなく、思いついたことをそのまま記述したように思える。

最後に、「逃げ出さなくても良い住まいとまちづくり」を進めたいと述べている。しかし、それは遠い未来の目標であり、現在、最も緊急な対策である耐震強化や避難訓練などは、逃げ出す時間的余裕を確保するためのものである。

支部関連行事の案内

1. 第11回京都支部幹事会

日時：3月16日（木）18：00～20：00

場所：京都支部事務局

2. 第3回大学問題シンポジウム

日時：3月20日（木）13：30～17：00

場所：中央大学後楽園キャンパス3号館

3F3300号教室

報告1 三輪定宣「大学の自治の歴史と現在（仮題）」

報告2 晴山一穂「文科省『天下り』問題と大学の自治・自立」

3. 第21回自然科学懇談会

日時：3月25日（土）13:30～15:30

場所：京大薬友会館 2階1・2会議室

テーマ：環境に適応した細胞運動—モリア
オガエルの精子の運動—

講師：久保田洋（元京大国際高等教育院 理学研究科教授：発生生物学）

3. シンポジウム「今、ベトナム戦争の枯れ葉剤被害障害者と平和教育を考える」

日時：3月26日（日）13:30～16:30

場所：キャンパスプラザ京都6F立命館大学
サテライト教室

シンポジスト：Dr.フォン、Dr.タン／尾崎
望／山田孝

司会：藤本文朗

主催：ベトナム障害者医療教育介護福祉協会

連絡先：藤本（Tel & Fax：075-541-5270）

4. JJS 3月読書会

日時：3月31日（金）14：00～16：30
場所：京大農学部総合館2階・E220室（第2会議室）
テーマ：JJS3月号特集「TPP」
担当：宗川（山浦論文 and/or 原論文），
足立（足立論文）

5. 第26回原発問題連続学習会

日時：4月1日（土）14:00～16：00
場所：教文センター
テーマ：福島甲状腺がんの被ばく発症
講師：宗川吉汪

寄稿：

憲法を暮らしに生かす科学の目

ー福島いじめについて思うことー

富田道男

福島事故から避難している児童に対して、金品の要求や言葉によるいじめが行われているとの報道がある。これは、指摘されているように、いじめる児童の親の問題であろう。

「賠償金という臨時収入があっいいな」「放射性物質による汚れはほんとに取れたのか」

「低線量被ばくなんて大したことはないのに避難して」といった心ない大人の話为背景とする児童の行動であろう。

賠償金は、破壊された生活に対して東電が当然支払うべきものであり、賠償金によって暮らしが元に戻ることはない。付着した放射性物質は全身検査をして完全に取除かれている。低線量被ばくについては、健康に大した影響はない、たとえ遺伝子が破壊されても

すぐに復元するから大丈夫などと、心無い科学者の喧伝が行われた。しかし放射線に電離作用があることは科学的事実であり、破壊された遺伝子が復元するとしても、それは個体差のあることであり、個体によりその影響は異なることである。

児童とともに避難している親は、憲法に則り児童憲章に則り、子供の将来の安全のために、児童の基本的人権を擁護するという保護者として当然のことをしているだけである。むしろ、放射線障害防止法の下では、放射線業務従事者に対する年間被ばく線量限度 20 ミリシーベルトの環境に子供を連れ戻すことの方が、子供の基本的人権を無視した非人間的行為と言うべきであろう。

◆◆◆幹事会・ワーキング会議だより◆◆◆

第10回幹事会（2/16）および第10回ワーキング会議（3/3）の報告

1. 会員の現況（3月3日）

一般会員240，家族割り特別会費会員4，若手会員7，若手特別会費会員19，
会員合計270，読者4

2. 会費納入状況（3月3日現在）

16年度会費未納者：一般 30/240，家族割0/4，若手 4/7，若手特別 10/19
15年度会費未納者：一般 7，若手 0，若手特別 5

14年度会費未納者：一般 1, 若手特別 2

3. 支部財政状況

毎月の支出はほぼ30万円ですが、現在、手持ちの現金は20万円不足です。

今年度は、あと2ヵ月、大会費用を含めて約70万円必要です。

未納者全員が納入したとして約50万円で、ギリギリです。

未納者の人にはお手紙を差し上げました。早めに会費を納入下さい。

4. 組織拡大について

年度末で定年を機に退会を希望される人がいます。

軍学共同、原発、環境、教育問題など、JSAが取り組まなければならない問題が山積しています。JSAは、科学の社会的機能を研究し、科学者の社会的責任をはたさなければならないと考えています。引き続きJSAの活動をつづけていただくようお願いしています。

5. 京都支部学術集会および第51回支部大会開催について

- ・以下の日程で開催する。

日時：5月21日（日）10：00～

会場：同志社大学今出川キャンパス

学術集会：10：00～13：00

大会：14：00～16：00

懇親会：17：00～19：00

- ・学術集会の演題を募集しています。締め切りは4月6日。

現在、以下の申込があります。

軍学共同（左近）／日本のブラック大学と大学改革（仮）（細川）／「南スーダンでの自衛隊活動の憲法問題」（奥野）／災害（奥西）／原発および核兵器（宗川）／若手活動（下門or中村or近間）

6. 2月～3月の支部関連行事（支部ニュース2月号発行（2/14）以降）

2月16日（木）2月読書会

2月16日（木）第9回支部幹事会

2月25日（土）第25回原発問題連続学習会

2月26日（日）学校統廃合と小中一貫教育を考える第7回全国交流集会 in 京都
@キャンパスプラザ京都

3月3日（金）第10回支部ワーキング会議

3月5日（日）大学評価学会公開講演会@龍谷大学

3月11日（土）バイバイ原発3.11きょうと@円山野外音楽堂

3月12日（日）関西懇3月例会@大阪支部事務局

（文責・宗川）

